

第28回 現代世界の地誌的考察

■■ 現代世界の諸地域編 ■■

世界のさまざまな地域を見てみよう

～朝鮮半島～

監修・講師

高橋 宏

学習のねらい

朝鮮半島は歴史的にも文化的にも日本と交流の深い近隣関係にある。はじめに、朝鮮半島の自然と人々のくらしの特徴を理解する。つぎに、韓国の経済発展と産業の発展をとりあげ、1960年代以降の韓国経済の歩みを振り返り、今日の韓国が工業製品輸出をテコとして成長してきた歴史を知る。さらに、日韓交流の歴史が変化している状況を把握し、日韓両国間の相互理解と相互利益の追求が重要な理由を学んでいく。特に、両国間の関係が近隣諸国また世界に対してもつ影響も視野に入れながら、共に責任ある国家同士としての関係構築が重要であることを確認していく。

今回のポイント

- 朝鮮半島の自然と人々のくらし
- 韓国の経済発展と産業の発展
- 日韓交流の変化と相互理解

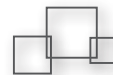
■■ 朝鮮半島の自然と人々のくらし ■■

朝鮮半島は、中国東北地域の東側にあり、ロシアともトマン川（豆満江）を挟んで接し、南北におよそ約1,000kmの長さにとんでいる。南部は温帯に属し、夏は湿潤で蒸し暑い温暖湿潤気候の最南部と、その直ぐ北の温暖冬季少雨気候に分かれ、後者では冬は緯度のわりに寒冷である。北部は大陸性の亜寒帯冬季少雨気候で、夏は涼しく、冬の寒さは大変に厳しい。

朝鮮半島の面積は全体で日本の58.4%ほどであるが、南部の韓国の面積は朝鮮半島のおよそ45%で、日本の約4分の1である。北部の北朝鮮の面積は朝鮮半島のおよそ55%で、日本の約3割である。現在の人口は、韓国が5,125万人で、首都ソウルに人口の5分の1が集中しており、北朝鮮は韓国の約半分の2,490万人である。

現在の朝鮮半島は北の朝鮮民主主義人民共和国と南の大韓民国に分かれ、1950～53年の朝鮮戦争の結果、軍事境界線＝休戦ライン（38度線）で分断され、その南北2kmずつを非武装地帯とし無人の地域としている。その中でパンムンジヨム（板門店）にある軍事停戦委員会本会議場は例外的に両国による共同警備が行われている。

韓国は1960年代半ばからインフラを整え、外資導入などにより工業化を進め、現在は首都ソウルには近代都市が成立し、所得水準も向上し先進国の一員となっている。北朝鮮は社会主義経済国家で、計画経済を採用しているが、資本や技術力の不足や軍事優先の先軍政治などのため、現在も経済の発展が遅れ、首都ピョンヤン（平壤）と地方との経済格差が大きい。



■ ■ 韓国の経済発展と産業の発展 ■ ■

戦後の韓国は、1960年代前半までは農業国であり、資源が少なくGDP（国内総生産）で北朝鮮を下回っていたが、1960年代半ばからの急速な経済開発の結果、産業構造の高度化、輸出拡大、経済成長を実現した。初めは、安価な労働力を利用した軽工業が中心であったが、1970年代初めから重化学工業の発展を目指し、大規模な工場を次々と建設し、輸出志向型工業化に成功を収め、その高度経済成長は「漢江^{ハンガン}の奇跡」と呼ばれた。1996年にはOECD（経済協力開発機構）への加盟も果たした。

しかし1997年7月にタイで生じた「アジア通貨危機」の影響を受け、韓国経済は大きな困難に直面した。それ以前から韓国は、財閥系企業の破綻などを原因として金融機関が不良債権を抱え、経済状況が大幅に悪化していたため、これによる外国資本の投資引き揚げも重なり、危機を深めた。この難局を乗り切るため、韓国は経済運営を一時的にIMF（国際通貨基金）にゆだねるなどの国際的支援を受け、経済立て直しのために財閥企業の統合や改革を行い、またIT産業を中心とした経済対策などを進めた。

その後、2008～09年にはリーマンショックによる世界的な金融・経済危機が襲う中、国際収支の赤字を抱えていた韓国は、対外債務の償還時期も重なり、自国通貨ウォンの大幅下落に直面し、ウォンと外国通貨との為替相場の安定を図る「スワップ協定」をアメリカと結び、また、日本と結んでいた日韓通貨スワップ協定額を拡大するなど、韓国経済の安定化を目指し、各国からの協力を仰いだ。

■ ■ 日韓交流の変化と相互理解 ■ ■

日本と韓国は歴史的にも密接な交流や対立などさまざまな形で関係を展開してきた。現在、世界の中で共に責任ある民主主義国家として、日韓の関係を発展させることは2国間の利益にとどまらない。両国関係は、世界的な視野に立って人権の尊重・法の遵守と秩序の重視・持続可能な社会の実現等に向けて、相互理解に立った前向きな関係としてさらに発展させることが重要である。

日本にとって韓国は、中国、アメリカに次ぐ第3位の貿易相手国でもあり、日本と韓国の経済的な結びつきは、グローバルな国際分業ネットワークの中で重要な位置を占めている。例えば、生産から供給・販売までの一連の過程を川の流れに例えると、(1) 原料・材料の調達・加工、(2) 素材・部品・製造設備などの生産、そして(3) 完成品の生産と流通・販売といったように、川上、川中、川下の3段階からなっている。日本の製造業は、川上、川中にあたる原材料生産や部品製造、製造設備の供給などで競争力が強いが、最近では韓国や中国が技術力をつけて、徐々に上流へと進出し始めている。

日本と韓国は、世界における両国の役割や相互経済交流の重要性を的確に認識し、本当の意味で友好的で相互信頼と相互利益を実現することが、国際社会における責任ある一員として世界の安定・平和・繁栄に貢献することにつながり、世界から信頼されるということ、正しく理解することが重要である。